殲滅する銃を！

――新泉社『「赤軍」ドキュメント』より

『情況』6月号（二〇〇八年）

山田孝
Yamada Takashi

赤軍中央軍アピール――一九七一・一二・一八

我々は連合赤軍の団結を強化、発展させ〝銃でもって断固せん滅戦を貫徹する〟強固な意思一致をかち取った事で革命戦士の死が乗り越えられるものであることを宣言する。同時に彼の血と魂の叫びをこの銃によるせん滅戦に絶対に勝利し抜く事で領導することを述べておきたい。この事を抜きにして柴野同志の一二・一八闘争を語ることは彼の示した英雄的闘争を単なる物語へと落としこめる以外何物でもないという事をはっきりと確認しなければならない。あの一二・一八闘争において我々が学ぶべき経験は実践はまず第一に敵権力から銃を断固奪取しようとした事であり、第二に警官に銃で殺されたことである。第二の問題から述べるなら我々はすでに革命戦争を大阪戦争、東京戦争そして大菩薩闘争として貫徹する中から革命戦争が殺すか、殺されるかの闘いであるものとして確認してきた。しかし、殺すことが殺されることであると言いつつも、軍と技術者グループを分離させ、一部の同志によってのみ武器が準備されたのだ、しかも軍内部においては軍の質の向上を欠落させたまま銃や爆弾が何かあたりまえのこととして、精神的意志一致でこの闘争を乗り切ろうとした。そして、軍の玉砕が首相官邸占拠＝敵の打倒と臨時革命政府樹立＝味方の発展を即決的に結合させていくといった即決戦略で意志一致された。福ちゃん荘を多数の警官にかこまれたとき誰一人として爆弾を投げる人間はいなかった。誰一人としてナイフで官憲を殺そうとして闘争しなかった。しかもそのことを誰一人として自己批判していない。これこそ大菩薩闘争の敗北の秘密をとく鍵のすべてであった。我々は、こうした殺すことが殺されること即ち人の要素第一を理解しえないことからくる武器を武器として考える傾向、即決戦略＝戦役主義を七〇年前峰、金融機関襲撃作戦の過程でも止揚しきれなかった。第一の問題に関して、我々はすでに大阪戦争、東京戦争において火炎ビンで交番を襲撃し銃を奪取することを考えていたにもかかわらず、一二・一七革命左派の同志諸君の如く銃奪取闘争として発展させきれなかったのは、〝爆弾や銃があればいつでも闘争がやれる〟という単純な言葉で示されるように武器を武器として考えることによったのである。まさに革命左派の同志は敵から銃を奪取することを〝奪取された銃〟にしか殲滅戦はやれないし、軍も強くできないことを柴野同志が殺されたという経験の中から革命戦争の根本問題として総括し、一二・一七銃奪取闘争として総括しきった。その後の〝銃を守ること〟の意味からつまり銃＝奪取された銃によって味方の強化をかち取ることを徹底的に煮詰まっていた敵権力からの攻勢との闘いの中で徹底した撤退として実践した。我々はこの一二・一八―一二・一七闘争をどう受けとめ連続金融機関襲撃作戦といかなる関係にあったのかを明確にしなければならない。我々は革命左派の同志諸君の一二・一八闘争を「柴野同志が殺されたのは殺す気がなかったからだ。我々なら最初から殺す気でやった。」と総括し、一二・一七闘争を「銃を奪取したことは成功だが銃の奪取に成功したならば次は銃を使って作戦をやるべきだ。」と総括した。かかる総括の立場は、せん滅戦への準備としての資金奪取と奪取した金によるせん滅作戦への着手として実践化された。なるほど白昼堂々と数丁のナイフで武装し断固として郵便局や銀行から資金を奪取し作戦は成功したかに見えた。そして一二・一七以降の革命左派の同志達の撤退に対して軍の機動性、作戦の連続性をもって誇りとさえしていた。「二が合して一になる」立場からの総括は一二・一八闘争をもって開始された銃を軸とした建党・建軍遊撃戦を把えることができず、革命左派の同志が一二・一七として総括を実践化することは「一が分れて二になる」立場そのものを体現していたのだ。大菩薩の敗北を革命の永続性の問題として抽象化した方法論の延長であった。我々は来る闘争において六百万円を奪取しながらも敵の強暴な包囲捜査網捕捉され、英雄的、革命的赤軍中央軍であり、連合赤軍兵士であった四名の同志と連合赤軍の共有財産として提起されていた銃を一挙に失いこの大きな損失は、決定的に革命の方法＝党―軍建設の方法環を革命左派の諸君から共に学ぶことを要求された。具体的には〝銃を軸としてのせん滅戦〟として内容が提出された。それは、すでに我々が建軍武装闘争の発展の成果としての連合赤軍兵士四名が権力に逮捕され、共有財産として提起されていた銃＝奪取されたときの銃からせん滅戦の銃へ発展しかけていた銃を失うことの我々中央軍への同志的批判として提出された内容であった。我々は、現在新たに発展させるべき連合赤軍の地平からとらえ返すならば、まさに連合赤軍の解体の危機であり、再度中央軍と人民革命軍を分離させ、新しい党建設を放棄するのかという決定的危機であった。ここで我々は一二・一八闘争――一二・一七闘争に立ち返って見るならば、柴野同志は警察から拳銃を奪取しようとしたことは単に武器としての銃を奪取しようとしたのではなかった。我々は銃が人を変えるのではなく人が銃を発展させることで自分もかわることができるということを、自らの死をかけて教えたのであり、このことを理解する者のみが真にせん滅戦を、銃を自らの手や足の如く使いこなせることができること、つまり銃によるせん滅戦が敵から武器を奪い、飛躍をかち取った主体のみが〝奪取した銃〟としてそれを使用して敵を殺し、敵を殺す事で日本革命戦争＝味方の飛躍、我々の実践としての建軍といった狭い領域としてではなく、建軍といい

う常に発展性を有した新たな地平を指し示していたのである。すなわち銃による主体の変革と主体の発展による銃の発展＝「プロ独を生みだす銃」の相互媒介的関係ををとらえられない時、〝人と銃〟は分離し、相互反発し、軍を機能主義的に考えたり、唯軍主義、唯武器主義として、組織的には民兵思想に代表される左翼日和見主義とレーニン党組織論一般論にすべてを還元—逆規定することで、銃によるせん滅戦を曖昧にすることで、銃抜きのせん滅戦を主張するのに代表される右翼日和見主義として生み出される。我々はそのことを銃がいかにしてプロ独を創るのか、すなわち銃が党を創ることを教条的にではなく把え返す作業を、六九年大菩薩闘争、七〇年前段階蜂起闘争、二・二八闘争、二・二七闘争、連続金融機関襲撃闘争、六・二七闘争、米子闘争を、把え返してみよう。きらびやかに銃砲店に並んでいる銃とハンターがレジャーで鳥を射つ銃は死んだ唯の銃であるが、しかし我々に一旦奪取されるや否やその銃は〝奪取された銃〟として成長を始める。その銃の成長はただ我々が武器として持つ限り発展しない。この段階の銃は、二・二七闘争で奪取された当時の銃である。だが、我々がそれを使ってせん滅戦を開始しようとしてそれを発展させることによって、我々はせん滅戦を担う革命戦士として飛躍成長するのみならず、銃も〝せん滅戦の銃〟へ飛躍するのである。この地平＝建軍武装闘争の地平から更にせん滅戦を勝利・勝利・勝利で戦うことの中で我々は単に敵を殺す事から、人民を銃で武装させ指導し抜く党主体として飛躍するのであり、この地平に到達すること、このことは〝せん滅する銃〟がプロ独権力を創る銃として飛躍することであり、〝鉄砲が政権をつくる〟（毛沢東）ことであり、決してこれを何か教条的に日本の革命に、建党—建軍にあてはめなくとも、我々は銃が敵をせん滅し味方を保存し、団結させる、すなわち銃こそが党を創ることができることを、銃の事をまじめに考えるだけで直ちに理解できる。この事から、菩薩闘争で我々が取り出した経験的実践は、爆弾があれば闘争はできる、というものであった。七〇年前段階蜂起では、一つに爆弾ができれば蜂起する、一つには人が集まればやる、であった。連続金融機関襲撃では、二・二七闘争と関連させると第一には金があればせん滅戦ができる、であり、第二には、奪取したら早く使えということは我々がすぐにM以降、せん滅戦をやろうとしたこと、第三には、左派の諸君が二・二七以降、合法と党—軍を分離したことに対し、分離の必要性を認めつつも（対権力の関係で外在的に）半合法ないし非合法化しつつあったF—大衆と結合しきれないことをもって、M政治的敗北として表現したこと、第四には戦術上の甘さを指摘しつつも同じ戦術を考えたこと、第五に、第一から第四には区別され互いに連関するが武器を武器として考えた。菩薩闘争の総括で同志塩見の総括、再総括の過程で、殺すこと＝殺されることを理解すべきであったということでもって人の要素＝党の軍人化、軍の党化を語りつつも技術としての軍事をこれに接木し、統一して把えようとすることから菩薩闘争において技術者グループと大衆M主義的な軍を生み出した問題、更には何故に日・J闘争が必然化されていったのか、単に〝人の要素〟が不十分だったという事ではなく建党—建軍の方法において〝人と武器〟を対立し統一するものとしてとらえることであり、さらにいえば、〝武器を武器としてしか菩薩闘争総括を展開しきれなかった問題〟であるのではないかと考える。菩薩闘争の敗北は人の要素＝殺すことは殺されることの自覚と、技術として蜂起を徹底化しきれなかったのでもなく、〝人と武器〟を分離させる建党・建軍の方法と実践にこそあったと総括すべきであった。そして七〇年前蜂は正にこの延長線上の闘いであり同じ矛盾を止揚しきれなかったがゆえに、いわば自滅せざるを得ない根本的問題をはらんでいたのである。そしてこの六九年菩薩、七〇年前蜂は形こそちがえ、軍内部に爆弾があればいつでもやれると言いながら実は、何もれない、極左空論主義的建軍に基ずく決意一般、政治一般の軍であった。逆に我々は何がなんでも前蜂だという一点でのみ結集軸をもつ軍であったが故にそこから提起する大衆運動主義的傾向＝軍と革命戦線との区別と連関の曖昧、唯軍主義的傾向を生み、軍の創造性を一切奪いつくしていった。逆に前蜂は戦争技術を発展させ、主体を発見させることを抜きにしかやりきれなかったと云えるし、そこでの死ぬ決意などゲリラ戦士のみが理解しうる〝勝利か死か〟の死ではなく小ブル的殉教者の死でしかなかった。更にM作戦に見るなら、二・二七で革命左派の同志諸君が敵からの攻勢を回避し撤退したことは味方と敵とのリアルな攻防の中で〝奪取した銃〟へ発展させることを通してかかる革命主体＝軍をうちきたえることであったろうし、そうであるがゆえに彼らがただちにせん滅戦をやれなかったのは日本革命戦争の中で主体がどう発展していけるのか、いかなる権力を打倒し、いかなる権力＝プロ独を樹立するのかの問題に答えようとしていたのであり、我々が菩薩で安保決戦——日帝打倒すなわち、敵の打倒と味方の発展、当時では臨時革命政府を樹立させ即時的に統合させたもののリアルな人の要素、軍事の問題に答えきれなかったことであり、M作戦がやられるべきではなかったという総括として提出されるのではなく〝人と武器〟の分離を止揚すること、即ち我々が現在主張している「人と武器」に武装された軍がM作戦を実践するなら、ちがった形態となったかは別にしても必ず勝利し初歩的非合法の欠如＝軍の整風の欠如から来る逮捕など決してないということである。金融機関襲撃は、資本主義社会が生み出す金への物神化の破壊、つまりプロ独期における私有財産制の消滅を先端的にやる闘争でもあり、日本革命戦争が更なる発展＝対峙段階に至るまでは大量の資金などなくとも、人の要素を発展させることで解決できるのであり、日本革命戦争の開始期、端緒期にあたっては金が無いからせん滅戦をやれなかったのではなく、銃によるせん滅戦を実践としてリアルな経験は実践をつきだしきれなかった故に、環の環としての、銃によってしか建党—建軍できないことに無自覚で何か軍の機動力すなわち軍事技術でのみ敵との攻防を弁証法的に飛躍させ飛躍させ、味方の発展をかちとれると考えていたが故に逆にその事から党＝軍を集中することができず、敵から追われて、アジトからアジトを追いかけまわされ、東京都内のみならず、日本国中を敗走することで資金をつかいはたしたのであり、そのことが金を連続的に要求したことであった。更に言えば党—軍の強固な

統一と団結が勝ちとられないことから、軍とFの分離を躊躇したことであり、分散が平板的分散＝分散の分散になったことにもかかわらず連続金融機関襲撃から一挙に銃によるせん滅戦をやろうとする小から大、分散から集中を戦役主義的に展開しようとした。それと関連して、かかる金であったが故にM作戦で逮捕された同志諸君が全面的にゲロしたり、闘争の評価に関しては断固支持するが金をとったことは自己批判するなどというナンセンスな対応として表れたのである。金が金額ほどの重みをもたなかったのである。我々の今の千円とかつての数百万円では今の千円の方がはるかに貴重で、重いものである。かかる環としてのせん滅戦と環の環としての銃の問題から軍の隊内生活を通じての共産主義化、自己批判と相互批判を通じての不断に党員として軍人としての鍛錬がなしきれなかったことがいかなる困難をもはねかえし、いかなる敵とも闘い勝利するという革命的気概を作り出すことができなかったし、新兵―新カードルをいかに鍛え育てあげるかに無方針であった。一般的な軍学校などでは決してカードル＝中央軍兵士・連合赤軍兵士など生まれない。六・一七闘争は我々の主体からいえば、主体の飛躍、すなわち赤軍兵士として自立しようとしたということであった。しかし、銃を使うせん滅戦という高次の組織性と計画性が要求され、それを担う主体は決定的に高い建党―建軍武装闘争にまで高め上げないかぎりできないものであることを抜きにしていたが故に、建党―建軍の立場よりは目的意識性を欠いた一発主義的なものであった。それは確かにそれ以降の大衆闘争に武装闘争を広めたものであったとしても、その機動隊せん滅がそれで革命戦争の量の拡大をもたらしたものであったとしても、環の環としての銃の問題を曖昧にし、六・一七機動隊せん滅戦を単に殺す段階にとどめ、銃を武器として考えることで〝人と武器〟の高次の矛盾止揚を、逆に大衆に、爆弾闘争が革命戦争を深め、党―軍を無用のものとして考える傾向を生み出したことである。最近では赤衛軍の崩壊をみるまでもなく我々のこの間の菩薩から現在に至る過程で幾多の逮捕者を出し、その逮捕者が自供することで同盟―軍の何度となく危機に陥ったことを経験しているが故に、武器を武器として扱うことからくる軍の自然成長性を、更にいえば銃の持つ意味を理解せず、従って逆に人の要素―強い闘う主体の建設を曖昧にしてきた。我々と革命左派の同志諸君は共に銃を持つことによって主体が高め上げられていくのを経験したし、その軍が相互批判―自己批判を通して闘争を対象化していくことが、党を創り、軍を創ることであることを学んだ。米子闘争についてみると、第一に連続金融機関襲撃では建軍できない。第二にせん滅戦をやらねば飛躍できない。第三に政治活動家をここで軍人にする。第四に断固銃を使うということからせん滅戦の準備をしたけれども、諸々の経過で貫徹しきれなかった。我々が直観的に考えていた内容は環の環としての銃を使うことからの実践では勿論なかったけれど、奪取された銃でもって主体の発展の契機はもったし、その延長線上に今までの連続金融機関襲撃とは違い、それは軍隊内部の発展の問題と革命戦争―銃によるせん滅戦への開始に対する敵権力の暴虐かぎりない弾圧、例えば同盟員によるテロ、リンチ、全国指名手配中の家へずうずうしく上がりこむなどの中で、まさにせん滅戦へ向けての資金奪取であったこと。我々中央軍は、だからといってこれを弁解するのではなく、我々が連合赤軍を結成してから固く意思統一していた銃によるせん滅戦が我々主体内部の弱さと相まって武器としての銃でしかうけとめられなかったと同時に、左派の同志諸君が提起した銃を軸としてのせん滅戦の総括――奪取された銃であったこと――によって米子でその奪取された銃を敵に何等応戦することなく奪われるという決定的危機にあった。我々は現在の連合赤軍の更なる団結の強化をかちとった地平から我々がはるかに低く、彼等もそこに到達しきれていなかったが故に、連合赤軍自身の内実が深く問われた。かかる意味でまさに連合赤軍を解体するかどうかが問われたと思う。しかし我々中央軍、連合赤軍は、敵権力から奪った銃でもって、敵を無力化し解体する闘いを、せん滅戦として闘うことにおいて〝奪取された銃〟を〝せん滅する銃〟へ発展させることで、団結の強化、統一を具体的に物質化しなければならない。かかる意味では到達した新しい地平に満足することなく〝プロ独を生み出す銃〟すなわち党―軍を創る銃へ飛躍させる闘争を、プロの政治を体現した銃でもってせん滅戦を展開することで、又、同志的相互批判―自己批判を通じて互いに新しい党を軍を創ることを実践的総括とし、柴野同志に答えなければならない。全ての労働者、学生、兄弟達！　我々中央軍、連合赤軍は新しい党―軍建設に向け〝せん滅する銃〟でもってせん滅戦を断固かちとることを実践的総括とし、……八闘争が常に不断に教訓を学ばねばならない闘争であったことをはっきり確認しなければならない。全ての労働者、学生、兄弟たち！　我々中央軍、連合赤軍は革命的気概をもって銃を使ったせん滅戦を貫徹するつもりである。